

國語より觀たる日本の國民性

三六

一、序 説

松 下 大 三 郎

日本の日本たる所以は何であるか。此の間に答へて多くの人は一齊に云ふであらう。萬世一系の皇統を戴くことに在る、忠君愛國の念の深いことに在る、忠孝一致の美點に在る、武士道の行はれることに在ると。併し我々の目から觀ればさういふことは結果であつて其等には由つて來るべき根本が無ければならない。其の根本が即ち日本の日本たる所以で最も尊いものである。教育上から云へば此の根本の培養に努めなければならぬ。根本に氣が附かず其の未だけを求めれば徒に形式に走つて遂には有無實に終る時が來ないとも限らない。勿論國民性でさう一朝一夕に其の特性を失ふといふことはないに相違ないが自ら意識して其の培養に努めるのと自然の成行に任せるのとは大に違つた結果を見るに相違ない。明治以來の教育は全く此の根本に觸れて居なかつたと思はれる。そこで國民性を異にしてゐる先進國の異常な文化によつたかると一時はその波を被つて溺惑して仕舞ふ。勿論國家から見れば一時のことには相違ないが、一生の短い我々に取つてはその一時が中々つらい。

其の根本の國民性とは何であるか。それは外國人と比較して考へると直ぐ分る。獨逸の大音樂家ベ

ベートーベンが月夜街上を散歩して一貧家の前を過ぎて自分の作つた曲を奏する洋琴の音を聞き興味を感じてその家へ這入つて見ると盲目の小娘が弾いてゐるのであつた。盲目で樂譜もなく可也甘く難曲を弾く腕前と音樂が唯一の樂であることに大に同情したがその不完全な安洋琴を借りて自分のその夜の感興を奏でた。その曲が有名な月光の曲である。此の月光の曲が非常な名曲でベートーベンの名は益高くなつた。此の話は音樂家の美談として世界に有名な話である。成程美談かも知れない。多くの音樂家は少し腕が上ると天狗になつて氣取つて仕舞つて貧家などへ這入つては行かないであらう。併し我々の怪訝に堪へないのは、其程同情した盲目の少女に對してベートーベンは何等救済の道を講じなかつた。資を給して音樂學校へ入れて遣るとか、相當の洋琴を一臺買つて遣る位なことはしさうなものである。日本人ならば無論そうだ。それもしない様なら始からそんな家へ這入らない。然るに西洋人は誰一人其れを怪むものはない。唯藝術家の美談として感服して居る。此のベートーベンの態度は西洋人一般の感服に由つて西洋人の人情の代表であることが分る。日本人の人情はベートーベンでは代表されない。ベートーベンの同情はベートーベン自己の快感に過ぎない。對手たる盲女が何と思はうとも自分さへ善ければそれで善いのである。盲女の心中を思ひ遣るといふ餘裕はない。日本人ならば盲女が自己の同情に共鳴しなければ満足しない。盲女の思はくを恐れる。

支那歸りの教師に聞くと支那の學校の寄宿舎などで學生が朝、顔を洗ふ時あとが何十人待つて居つても自分一人の時と同様に緩くり洗ふといふことである。日本人ならば待つ人が多ければ大急ぎでざつと洗ふであらう。支那人は他人の思はくを恐れないが日本人は他人の思はくを氣にする。教師に對し

てもそうだ。支那人は新任の教師が氣に入らないと教授中にどん／＼退場する。それはまだ善いとしても日本人に出来ないことは一人退場し後れて一番後になつたものが、教師の顔を見ながら矢張り出て行く。日本人ならば幾ら氣に入らぬ教師でも一時間だけは我慢する。況して最後の一人となつた場合に出られるものではない。支那人はその場合に教師に氣の毒だと思ふ感じが起らないのである。支那の革命前に日本の或る學校へ天津の高等女學校長が參觀に來た時在校の支那人は自國の調査員で革命黨に對する隱密だと思つて控所へ推し懸けて行つて殴らうとした。女學校長は驚いて名刺を出して調査員でないことを辯明した。此の名刺を受取つた學生は自分だけ承知して引き下るので他の學生に喧傳しようとはしないから、名刺の有る間は善かつたが名刺が盡きると同時に大勢に殴られて仕舞つた。名刺を受取つた者が二三十人はあつたにも拘らず、受け取つた當人意外には名刺の効力がなかつた。支那人は自分が分れば其れで善いので他人に喧傳する必要はないのである。人に知らせなければ知らない人が女學校長を殴るだらうから女學校長に氣の毒だといふ感じは起らない。唯自分は分つたから殴るのをよすといふだけだ。英國人なども同様だ。日本人にはこのまねは出来ない。

平和會議の時日本の委員は接衝が随分甘かつたがそれでもウキルンやクレマンソーを向うに廻しての晴れの舞臺であるから幾分場打てがしたり氣後れがしたりした形跡がある。所が支那人になると如何なる人も場打てや氣後れがするといふことはない。唯實際力の及ばない時に恐れるといふことはあつても能力以外の場打てといふことはない。どこまでもづ／＼しく何處までも押が強い。殆ど駄目と思はれることでも駄目と決定するまでは談判する。談判せず遠慮して損をするやうなことは無い。

それは皆相手の思はくを恐れなからである。支那には「遠慮」とか「氣兼」とか「場打て」とか「氣後れ」「はにかむ」とか「内氣」とか「手控へる」とかいふ様な詞がない。謙讓とか客氣とか不敬とか怯とか不盡とか羞耻とかいふ詞はあつても意味の具合が違ふ。皆他人の思はくを恐れた感じをいふのではなく唯自己の都合から割り出した觀念を表はすのである。それだから支那人は弱者でありながら外交は甘い。日本人は外交がまづい。それは對手の思はくを恐れて遠慮するからである。

耶蘇教の學校に給費の制度のあるものがある。毎週所定の時間を一時間でも缺席すると給費を止める。病氣でもだめだ。日本人の目から見ると病氣もだめといふのは人情に戻る様に思ふが彼等の目から見ればそうでない。眞に病氣ならばその人の不幸である。學校では給費の總額はきまつて居る。病氣で給費を止められる人が出来ればその金は他の人へ給するので社會を利する點に於て變りはないのである。日本人から云へば社會を利する點はとにかく病氣でも缺席すれば給費を止めるといふことはその人に氣の毒で出来ない。

西洋人は公德を重んずる。公園の花を折る様なことはない。日本人は一個人の花ならば折らないが公園の花は折る人がある。それは公園には特定の持主が無いから持主の思はくを恐れる必要がないからである。

楚の項羽が失敗して唯一騎江岸まで落ち延びた時亭の長は舟を用意して、江を渡つて再び旗を舉げむことを勧めた。項羽は自分は始め江東八千の子弟と共に旗を舉げた、然るに今八千の子弟皆喪つて自分一人江東へ歸つたならば江東の父老は何といふであらうか、縦令父老が我を許すとも何の面目がある。

つて父老に見えようかと云つて遂に自ら刎ねて死んだ。項羽の如きは支那歴史有つて以來稀に見る所であつて日本人をつくりだ。日本人が項羽に同情するのは尤な話である。併し支那人はそれ程に同情しない。高祖が始めて帝位に即いた時徹侯諸將をして項羽の失敗して自分の成功した所以を述べさせた時、王陵が云ふには項羽は人情が厚くて餓者を見れば食を分ち寒えた者を見れば衣を脱いで着せるといふ方だが此れは婦人の仁である。陛下はそんな小さい仁はないが天下を濟ふの大仁があると云つた。誠に實利實益の上より見れば餓者に食を分つは小仁である。個人には刻薄でも天下を利する者が善からう。併し其れは英雄豪傑のことであつて天下萬民にはそんな大仁は要らない。個人に對する思遣があればそれで澤山だ。

日本人の國民性は情的方面に在つては此の思遣といふことより外に何物もない。西洋人や支那人に全く見ないことである。西洋人や支那人の眼中には自己の實利實益以外には何物もない。自己の實利實益を謀るには他人の實利實益をも保護してやらなければならない。そこで社會が發達すれば權利義務といふ觀念が發達して来る。自己の利益のためには權利があり他人の利益の爲には義務があり、此の二つが並び行はれて自己双方の利益になる。そうなつて行けば誠に結構な様だがそれでは社會は取引關係だ、商業生活だ。文明とは取引の圓滿に行はれる商的生活をいふことになる。日本は根本が思遣にあるので實利實益は第二だ。權利義務も第二だ。思遣は義理人情といふ形になつて現はれる。人々が互に義理人情に厚ければ社會は一大家庭だ、親族關係だ。權利義務の圓滿な商社會と義理人情の厚い家庭社會との優劣は所謂小乘と大乘の差だ。

此の思遣といふことが人々との凡ゆる關係に現はれるが支那歴史を見るも暴君といふものゝ絶えたるがない。支那の天子が人民に對して思遣の無いことは國民性であるが、それでも明君は暴政の良策にあらざるを知つて自ら放恣を誡めるが、暗君はその自制がない。思遣の無いとが露骨に現はれて凡ゆる勝手をやる。人民の方は又上に對する思遣がないから少しでも不便があれば上を怨む。天災地變までも天子の徳の無い結果と見る。上下互に思遣がないから革命は頻々として起る。日本には昔から暴君といふものは一人もない。世々の天皇の御心配といふものは國が治まるかどうか。民が塗炭に苦む様なことは無いかどうかといふことより外はないのである。將軍としてもその通りである。諸侯の中には幾らか我が儘をしたものも有つた様であるが其れも大したことはない。下の上に於ける亦その通りであるに對して思遣が有る。詩經を讀めば上を怨む様な詩が大變多い。最ひどのひのは孔子が削つたのであるに尙そうだ。日本の萬葉集にはそんな歌は一首も無い。日清戰後に余は少年時代であつたが故郷の百姓、炭焼の様な無智の者に對して日本は借金三億圓を取ることになつたと話した。中には「何億取つたつて我々に分けて呉れる譯ではなし、つまらない」といふ者があるかと思つたら、誰に話してもそんなことをいふ者は一人もなかつた。皆「それでは天子様の御都合がお宜しいでせう」と云つた。上下互にこういう思遣が有るから萬世一系は當然の話である。忠君愛國などといふが戦争でもあれば忠君愛國の仕様もあるが平時に君に對して忠義を盡さうとしたつて方法が無い。唯、人民一般が君に對して思遣が有れば其れで善い。そういう人の中から忠臣は出るのである。忠君といふことは軍隊の標語には善からうが國民教育としては皇室の尊いことと上下の思遣といふことを教へればそれで善い。

此の「思遣」といふことが日本人の國民性であるといふことは果して本當であるかどうか。何か立派な證據が無ければ必ず本當だとは云へない。それを余は國語の研究に由つて立證することを得た。

アインスタインは宇宙の諸現象はみな數學的に計量することが出来る譯である。心理學的現象なども數學的に表現されてこそ眞の智識であると云つた。凡べてを數學的に表はすといふことは今日の科學では不可能であるが、併し或る程度までは稍それに近いことが出来る。例へば今春の夜の月と秋の夜のとどちらが日本詩人に對して趣味が深かつたかといふことを數學的に表はさうとする場合に、國歌大觀に由つて「春の夜の月」といふ句と「秋の夜の月」といふ句の數を數へて見るとその趣味の數字の比が出る。この位の程度の計算ならば出来る。「思遣」の立證も數學的には行かんが文法上に有形に具體的に現はれてゐる。

それは言語の運用上に於ける人に對する說話者の感情を表はす方式である。その一は敬語であり、その二は動詞の利益態である。その三は各詞の同情態である。其の四は中止態である。更に日本人の知性の優秀なることは詞辭の排列に現れてゐる。

敬語は外國語にもあるがそれは皆文學者の作つた修辭上の敬語であつて文法的敬語ではない。對者を敬つて足下、閣下、先生、大人などと云ひ、自分を卑下して小子、小生、鄙人、僕などと云ふだけでこゝういふのは文法的敬語ではない。日本語の代名詞で私、私ども、貴方、貴方がたといふ様な區別が有つても此れは文法上の單數、複數ではない。動詞にまで關係して I am, we are といふ様にならなければ文法的單複數とは云へない。敬語もこゝうである。唯代名詞や名詞に敬語があつても文法的敬語と

は云へない。文法的敬語は動詞にも關係して形式的に表はれて居なければならぬ。修辭的敬語は文學者の作つたもので國民性の發露ではない。文法的敬語は國民の間に自然に出來たもので人に對する思遣の念が言語に現はれたものである。

二、敬語の體系

日本語の敬語は文法的敬語であつて名詞にも代名詞にも動詞にも形容詞にも一貫して存する。そうしてその敬ふべきものゝ文法上の立場に由つて違つた方式を取つて居る。その體系の壯大は實に敬嘆に値する。

名詞の敬稱

名詞（代名詞を含む）の敬稱はその敬はるゝものを表はす詞の文法上の立場に由りて之を自體敬稱、所有敬稱、主體敬稱、客體敬稱の四種に分ける。

自體敬稱

自體敬稱はその名詞の表はす所の人物そのものを敬ふものである。その方式はその名詞へ「さま」「さん」を附けるに在る。旦那さま、奥さま、お子さん、弟さんなどの類だ。「さん」は「さま」の音便で「さま」より尊敬の意が浅い。「さま」はもと名詞の「様」から轉じたもので直接にその人を指すのは恐多いからその人の様子を表はして間接にその人を指したことから變じて文法的敬稱となつたの

である。又複数を表はす場合には敬稱では「ども」「ら」などを使はずに「かた」「たち」を附ける。「お子さまがた」「御嬢さんたち」の類だ。又形式的名詞では「者」「奴」と云はずに「方」「お方」と云ひ代名詞では「お前」と云はずに「貴方」といふ。

敬稱の反對に卑稱がある。「さま」に對しては「め」、複数の「かた」に對しては「ども」、形式名詞の「御方」に對しては「奴」、代名詞では「貴様」「私」などだ。卑稱は自分へ使へば謙讓になる。

自體敬稱には本質的と屬性的と二つある。右の例は皆本質的自體敬稱であるが「お一人様」「お三人様」「御新規様」「御始めて様」「お一方」「お三方」などは屬性的である。「お一人様」は料理屋などに於て客の名を知らざるが故にその特徴を擬人して敬稱を用ゐる連れの客だから「お一人様」といふのである。

所有敬稱

所有敬稱はそのものゝ所有者を敬ふもので頭へ「お」「御」をつける。「御」は字音の語へつける。「御名前」「御年」「御姓名」「御家族」などの類だ。字音でも平易な者へは「お」を附けて「お宅」「お精」などの様にいふのがある。所有敬稱はその所有者を敬ふのでその物を敬ふのではない。「彼の方のお名前」と云へば「お名前」は名前を敬ふのではなくてその持主たる彼の方を敬ふのである。「貴方の御つれさま」と云へば「さま」に由つて「つれ」を敬ひ、「お」に由つて其の所有者貴方を敬ふ。「お」と「大御オホミ」であつて「おほみ」が「おはん」となり「おん」となり「お」となつたのである。「おん」の漢字は「御」に「ん」を當てるが「ん」は其の音である。漢字の字義は「ん」である。

が所有敬稱の授けたる所有者に愚慮、愚弟、愚妹、愚妻などの様なのがある。これは敬稱なる令思、令弟などと同じ様にまだ修辭的敬語の域を脱しないものである。

所有敬稱には事物的所有敬稱と動作的所有敬稱との別がある。右に擧げた語は事物的所有敬稱で事物の所有者を敬ふものだ。

動作的所有敬稱は動作の所有者を敬ふものでこれには主體的所有敬稱と客體的所有敬稱との二種ある。

御歸りを御待ち致します。

御助けを願ふ。

どうもお答へが出来ません。

必ずお知らせを致します。

の「御歸り」「御助け」は歸る人、助ける人を敬ふから主體的所有敬稱であるが、「御答へ」「御知らせ」は答へる對手、知らせる對手を敬ふのであるから客體的所有敬稱だ。

所有敬稱に直接と間接との別がある。右の例は皆直接の所有者を敬ふのであるが

あなのお召のお模様は本當に善うございますねえ。

この邊になりますとお値段も張りますです。

の「お模様」はその所有者なる「お召」のその所有者あなたを敬ひ、「お値段」はその所有者なる品物を客に賣るとして客を品物の所有者と見なして客を敬ふのである。之を間接所有敬稱といふ。

所有敬稱には又實性と虚性との別がある。右に擧げた例は皆實性であるが自分の用ゐる物でも「お茶」「お湯」「お菓子」「お米」「お肴」「御酒グシユ」「御飯」などといふことがある。これはもと主人持の人

が主人の茶を自分が使ふから「お茶」と云つたのを一般の人が真似て「茶」を「お茶」といふ様になつたので最初は敬ふべき所有者が有つたのであるが今日では敬ふべき所有者がない。即ち虚主を敬ふのである。敬稱の形式ではあるが敬ふ所はない。だから又美稱ともいふ。「お父様」「お母様」などの「お」も女子の名につけて「お花」「お春」などといふ「お」も美稱である。品物の美稱は婦人小兒の語である。男子は「お米」「お肴」などと云はない方が善い。尤「御飯」などは「飯」だけでは獨立しないから仕方がない。

自體敬稱にも、お月様、雷様、大工さん、お醫者さん、お嫁さんなど敬語の性質を失つた用法がないではないが、なるべく使はない方が善い。

主體敬稱、客體敬稱

主體敬語は事件の主體を敬ふものである。「仰せ」などはそうだ。事件の主體は事件の所有者と見て所有敬語を使ふ例になつて居るから主體敬稱といふものは甚だ少ない。客體敬稱は事件の客體を敬ふもので拜觀、拜診、拜謁、拜讀、拜見、拜借、頂戴、献上などの類だ。此れは直接にその動作の客體を敬ふ場合と間接に客體の所有者を敬ふ場合とある。「拜謁」などは前者で「拜觀」などは後者だ。

動詞の敬稱

動詞の敬稱は主體敬稱、客體敬稱、所有敬稱、對者敬稱の四稱ある。今「云ふ」といふ動詞に就いて其の區別を云ふと、

甲事務員が乙事務員に向つて

丙君は此の事業は大に有望だと云ふが君はどう思ふ

此の「云ふ」は無待遇の動詞であつて尊敬の意味も賤む意味もない。同輩丙の動作を同輩乙に向つて述べるのであるから其れで善い。

甲事務員が乙事務員に向つて

社長は此の事業は大に有望だと仰やる（云はれる）が君はどう思ふ。

「仰やる」「云はれる」は「云ふ」の主體敬稱で「云ふ」の主體即云ふ人（社長）を敬ふのである。

甲事務員が社長に向つて

乙は此の事業は有望と由します（云ひます）が貴方は如何御考へになりますか。

「申します」「云ひます」は「云ふ」の對者敬稱で談話の對手即ち聞く人を敬ふ詞であるからこれは甲が自己の説話を聞く人即ち社長を敬つたのである。

甲事務員が乙事務員に向つて

社長が此の事業は有望かどうかと御尋ねになつたら君は何と申し上げる

「申し上げる」は「云ふ」の客體敬稱で「云ふ」の客體即ち聞く人（社長）を敬ふのである。聞く人と云つても前例の聞く人とは意味が違ふ。前例の聞く人は甲の説話を聞く人であるが此の例のは甲の説話を聞く人ではなくて乙の説話を聞く人だ。若し甲の説話を聞く人を敬ふならば「申し上げます」ではなくて「申します」だ。

甲が乙に向つて

社長が何と御云ひになつても僕は御答へしない

の「お云ひ」「お答へ」は所有敬稱だ。「お云ひ」は社長の動作であるから其の動作は社長の所有だ。こういうのを主體的所有敬語といふ。「云はれる」と大抵、同じであるが。「云はれる」は單純なる主體敬稱で唯「云ふ」の主體を敬ふのでその動作を主體の所有とは見ないが、「お云ひ」は之をその主體の所有と見ていふので、互に見方が違ふ。「お答へ」は乙の動作であるがこれは社長に答へるのでその答へは社長に奉る動作であるから社長の所有に歸すべきものである。それ故所有敬稱を使ふ。こういうのを客體的所有敬稱といふ。動作の客體が動作の所有者になる。所有敬稱には主體的所有敬稱と客體的所有敬稱との二種あるのである。

動詞の敬語には

主體敬稱——云はれる

客體敬稱——申し上げる

對者敬稱——云ひます

所有敬稱——お云ひ

の四種あるのであるが、此の四種の敬稱の二つ以上を一動詞が兼ねることが屢ある。之を敬稱の干涉といふ。例へば

社長が御答へしない

貴方は御縁談の事に就いてお父様に何とお申し上げ遊ばしました。

此の「お申し上げ遊ばしました」は一つの連語動詞であつてその實質は「云つた」と同じである。「お」が附いて所有敬稱になり、令嬢をその動作の所有者として敬ひ、「申し上げ」の固有的に有する客體敬稱で令嬢の父を、動作の客體として敬ひ、「遊ばし」が附いて主體敬稱となり令嬢を動作の主體として稱ひ、「ます」が附いて對者敬稱となつて令嬢を自己（乳母）の談話の對手として敬ふので此の敬語は「所有敬稱兼客體敬稱兼主體敬稱兼對者敬稱」で最複雑なる敬語である。若し無待遇の語ならば

お前は縁談の事に就いて父に何と云つた

であるが、これでは西洋人の語であつて日本人の目から見れば片言だ。人に對して人情を持たない者の言である。そんな語を使ふ人種は所謂科學獸だ。科學の出来る獸類だ。

父が祖父の事を子に問ふには

お祖父様はまだお歸りにならないか——所有敬稱

……………お歸りなさらないか——所有敬稱兼主體敬稱

父が子のことを祖父に問ふには

あの子はまだ歸りませんか——對者敬稱

子が祖父のことを父に問ふには

お祖父様はまだお歸りになりませんか——所有敬稱兼對者敬稱

……………お歸りなさいませんか——所有敬稱兼主體敬稱兼對者敬稱

同輩どうしならば

それで貴方はいつ歸りますか――對者敬稱

上輩か下輩に云ふには

それで貴方はいつお歸りになる——所有敬稱

下輩が上輩にいは

それで貴方はいつお歸りになりますか——所有敬稱兼對者敬稱

上輩が懸隔ある下輩にふには（或は爾汝の間にては）

それで君はいつ歸る——無待遇

交際の状態 親疎の別にも由るが、大體こゝいふ様な區別がある。

主體敬稱

主體敬稱は動詞の一文法的運用法でその表はす動作の主體を敬ふものである。主體敬稱を示す方法は四種ある。

一、主體敬稱にのみ用ゐる特殊の動詞がある。

入らつしやる——（行く、来る、居る）

仰せらるゝ（云ふ）

見える——（行く、来る、居る）

仰せ（無活用）——（云ふ）

おつしやる——(云ふ)

爲さる―(爲る)

建文市書山(爲念)引經(丁亥)交附(引經)了結申(思召)並(引)了(思之)

召す——(食べる、飲む、着る、乗る、這入る、使ふ)

右のうち無活用(無活用)の動詞は實質格(Infinitive)の下へ形式動詞(Auxiliary verb)「なせる」「あそぶ」を附け或は名詞にして「に」を附けて一致格にしてその下へ「なる」をつける。

二、第二段へ「れる」「られる」を附け又稀には「せられる」「させられる」を附ける

御主人は何時歸られるでせうか

貴方が折角勧められるからそう致しませう

陛下は大本營を廣島へ進めさせられた

明日行幸有らせられる

「れる」「られる」は元、被動の語であるのに、その敬語になる理由は、その人の動作を自分が受けるものと假定していふから自分が貴人の動作を賜はる意味になるのだ。貴人が人の動作を受けるといふ説は誤である。又は貴人の能性を表はすといふ説も誤である。貴人の動作を直接に表はすのは威尊を潰すから間接に表はすといふ意味から發達したものである。「せられる」「させられる」の「せ」「させ」は、元、使動であるが、貴人は何でも自分でせずに必ず人に命令するといふ意味から出たのである。一の「入らつしやる」「おつしやる」「爲さる」は元は「入らせられる」「仰せられる」「爲される」から轉じたのである。最初は下一段であつたのが段々四段活に變つたのである。

三、第二段へ「なさる」を附けると軽い敬稱になる。此れは下輩に對してのみ用ゐられる。「行きなさ

る」「云ひなさる」「買ひなさる」など。

貴方は昨日何處へ行きなすつた。

四、無活用の動詞は下へ形式動詞「する」を附けると「勉強する」「旅行する」などの様に無待遇であるが「する」の代りに「爲さる」「遊ばす」「有らせられる」を附けると主體敬稱になる。

勉強なさる

勉強あそばす

勉強あらせられる

御勉強なさる

御勉強あそばす

御勉強あらせられる

お笑ひなさる

お笑ひあそばす

お笑ひあらせられる

「お笑ひ」「お歸り」などの様に上へ「お」を附けて第二段を使つたものは一つの無活用動詞である。これへ「なさる」を附けたのは(三)と違ふ。

客體敬稱

客體敬稱は動詞に屬する敬語で動作の客體を敬ふものである。客體敬稱を示す方式は二つある。

「元から、客體敬稱になつて居る動詞がある。

上る(行く)

出る(行く)

伺ふ(行く)

伺ふ(問ふ)

申す(爲る)

戴く(貰ふ)

申し上げる(云ふ)

上げる(遣る)

差上げる(遣る)

*拜見(見る)

*拜借(借りる)

*頂戴(貰ふ)

「申す」はこゝでは云ふ意味ではない。「御手傳を申す」などの様に「する」の意味になる。*は無活用動

詞である。「下へ」「する」「なる」「致す」「あそばす」「申す」を附けて使ふ。この外尙「拜領」「拜謁」「拜觀」「拜讀」なども稀には使ふ。

二、頭へ「お」「御」の附いた無活用動詞の下へ「申す」を附ける。一切の動詞は第二段を用ゐて頭へ「お」を附ければ無活用動詞になるから此の(二)の用法は一切の動詞に用ゐ得るのである。

御盡力申す

御周旋申す

御見舞申す

御笑ひ申す

御話し申す

御訪ね申す

などの様になる。併し此の(二)の用法は頭に「お」「御」があるから所有敬稱兼客體敬稱だ。

「申す」を「申し上げる」に變へると其の人の爲にといふ意味の客體敬稱になる。

御盡力申し上げる

御周旋申し上げる

御助け申し上げる

それだから、その人の爲にならない動作では「申す」は使へるが申し上げるは使へない。「御笑ひ申し上げる」などといふと侮辱したことになる。自分の用事で訪ねた場合には、「御訪ね申す」であつて「御訪ね申し上げる」ではない。先方の用事で訪ねた場合ならば差支ない。

客體敬稱は「貴方をお手傳ひ申す」などの様に直接に客體を敬ふ場合と、「貴方の御仕事をお手傳ひ申す」などの様に間接に客體の所有者を敬ふ場合とある。

對者敬稱

對者敬稱は動詞に屬する敬稱で説明者の聽者に對する尊敬を表はすものである。その方式は三つある。

一、一般の動詞は第二段へ「ます」を附ける

行きます

歸ります

云ひます

話します

二、「だ」の對者敬語は「だります」と云はずに「です」といふ。

日本です

外國です

綺麗です

立派です

「日本です」の様なものも動詞の一種だ。區別して云へば名詞性動詞、狀態性動作動詞といふ。

三、狀態動詞即ち所謂の形容詞は第二段「く」の音便「う」へ「ござんす」「ございます」を附ける

善うござんす

善うございます

近うござんす

近うございます

久しうござんす

久しうございます

苦しうござんす

苦しうございます

これを約めて「善うごす」「近うごす」などともいふ。併し「ちかござんす」「近」「ながござんす」「長」

などと云ふのは無智階級の語である。

對者敬稱に似て大に違ふものに莊重語といふものがある。

(平常語)

行く、来る、居る

(莊重語)

參る

ゐる

をる

云ふ

申す

爲る

致す

ある

御座る

知る、思ふ

存じる、存する

下へ「ます」を附けて對者敬稱を兼ねる場合が多い。殊に「御座る」などは「ます」を附けない場合は近時の語では甚だ稀だ。

莊重語は下の者が上に向つて使へば上の人の威尊を潰さない意味になるから對者敬稱と似た効果を生ずるが對者敬稱と違ふことは上の者が下の者に向つて云ふ場合或は上でも下でもよくしく嚴肅にいふ場合には自己の威嚴を保つことになる。莊重語は動詞にあるばかりではなく名詞にも副詞に何詞にもある。こんにち(けふ) みやう日(あした) 兩三年(二三年) こちら(こつち)、どちら(どつち)、いづれ(どれ)、如何(どう)などがそうだ。實際に使ふと

左様には參らん

左様の儀は罷り成らん

相濟まんことを致した

一向に存せん

千萬辱ない

至極御尤もで御座る

兩三日の御猶豫を願ふ

拙者の一存では決し兼ねる

平に御用捨に預りたい

何分の御沙汰を煩はしたい

所有敬稱

所有敬稱は事件の所有者を敬ふもので名詞にもあるが動詞にもある。動詞の一種なる狀態動詞(所謂形容詞)にも有る。

國語より觀たる日本の國民性

所有敬稱は頭へ「お」御」を附けて示すことは名詞と同じである。主體的所有敬稱と客體的所有敬稱との二つに分れる。

主體的所有敬稱は事件の主體を事件の所有者として取扱つてそれを敬ふものである。

貴方は何時御出發なさいますか

お父様もお喜びなさるでせう

さぞお寒うございましたらう

右の様なはその主語の表はす人を敬ふのであるから直接主體的所有敬稱といふが次の様なのは間接主體的所有敬稱といふ。

彼の方の御召がそりやお立派ですよ

お優しい御心の方でいらつしやいます

まあお涼しいお目つきでいらつしやいますこと

中々御値段もお高うございます

「お立派」の所有者は御召だが、御召を敬ふのではない、御召の所有者「彼の方」を敬ふのである。「お高う」はその所有者なる「お値段」の其の又所有者なる品物を客に賣るものと考へ客を品物の所有者と見なして非常に間接なる所有者を敬ふのである。

主體的所有敬稱に「様」を附けるのがある。これは「御氣毒な」「御苦勞な」などの様に「な」の附く状態動詞（形容的）に限る。

お氣毒様

御親切様

御尤様

御苦勞様

お難有様

御愁傷様

御叮嚀様

御迷惑様

お世話様

御面倒様

御厄介様

お樂み様

お丈夫様

御機嫌様

お利巧様

御心配様

御不自由様

お目出度様

御繁昌様

お立派様

お手數様

御足勞様

お待遠様

御大儀様

おせつかい様

御災難様

御難儀様

御都合様

お大抵様

御不足様

御懇様

おめ様

此等は段々廢れ行く語であつて今の若い人の使ふのは御氣の毒様、御苦勞様、御世話様の三つ位であらう。それすら使はない人が多い。此等のもと名詞なる「御蔭様」の様な無形物の擬人的敬稱から始まつたので今日では狀態動詞(形容詞)化して居る。又此の中には客體的所有敬稱にもなるのである。

客體的所有敬稱は事件の客體を事件の所有者として敬ふものである。

決して貴方をお笑ひ申したではありません

一寸彼の方にお勧め致しました

彼の方を御案内申しなさい

などは直接客體を所有者として敬ふのだが

貴方の御説に御賛成申します

あの方の御仕事を御手傳致して居ります

五八

あとは客體「御説」、「御仕事」の所有者たる貴方、彼の方を敬ふ客體的間接所有敬稱である。

呼 號 詞 の 敬 稱

呼號詞（間投詞）の敬稱は皆對者敬稱である。

もし〜（おい〜）

はあ（あゝ）

はい（あい）

へえ（えゝ）

いえ（いや）

いゝえ（いゝや）

三、利 益 態

動詞の一運用法に利益態といふものがある。これはその動作の結果が或る人の利益となることを表はすものである。例へば

(一) あの方が私を連れて行つた

(二) あの方が私を連れて行つて下さつた

の(一)は何等利益の意味を表はして居ないが(二)は彼の人の動作の結果が私の利益となるべきことを表はして居て私の彼の人に對する感謝の意が十分現れてゐる。

利益態を分つて他行自利態、自行他利態、自行自利態の三つとする。

他行自利態は他人の動作の結果が自己の利益となることを表はすものである。これは動詞の方法格

(テの附いたもの)の下へ補助動詞(Auxiliary verb)の「呉れる」「下さる」を附ける。

友達が僕に傘を貸して呉れた(下さつた)

あの先生が内の子供に英語を教へて下さる(呉れる)

御前一寸使に行つて來て呉れ(下さい)

の様にいふ。動作は他人の動作で動作の關係者と利益者とは自己(或は自己側の者を自己として見たもの)である。他人の勞を多とする意味が含まれて居る。日本人は思遣があるから他人が我に對して我の爲に取りたる勞に對しては必ず其れ相當に感謝の意を持つ。それが言語に現はれたものがこの他行自利態である。無待遇には「呉れる」を使ひ、主體敬稱には「下さる」を使ふ。縱令我が使用人たる下女などに命令する場合でも其の働を多とする心が有るから「行て來い」と云ふことは少くて「行つて來て呉れ」といふ。「行つて來い」と云はれたより下女がどの位心持が善いか知れない。友達などに頼まれた場合でも「なあ早く行つて呉れよ」と云はれれば心持が善いが敬語でも「早く行つていらつしやい」と云はれては堪らない。

唯、自分を手傳つて呉れる人などには却つて「呉れる」「下さる」を使はない方が善い場合がある。

使ふとその人を局外者扱ひにしたことになるからである。「君、これはこうし給へ」といふ方が「こうして呉れ給へ」よりも善い場合がある。

自行他利體は自己の動作が他人の利益になる意味を表はすものである。動詞の方法格の下へ補助動詞「遣る」「上げる」「差上げる」を附けて表はす。

(一) 序があるから僕が買つて来て遣らう (上げよう)

(二) あの人が讀みたいといふから貸して遣つた (上げた)

(三) あんな奴は少し懲して遣る方が善い

皆自己の動作が他人の利益になる。併し此の用法は下手をすると思に着せる様な意味になりやすいから注意しなければならない。右の例などは善い。右の(一)は恩に着せるのでは無い。その物を買ふことを其の人が自分に頼む頼まないは其の人の自由であつて自分が干渉する限でないからその用事をその人の用事として表はすから「買つて来てやらう」と云ふのである。「買て来よう」と云つては餘分な干渉する意味になる恐れがある。(二)(三)などは恩に着せる意味になり様がない。醫者が患者に向つて

明日注射して上げませう

などといふのはまづい。無償ではあるまいし、「上げませう」といふべき謂れが無い。言語に注意する患者は不愉快であらう。醫者は治療を任せられ、教師は教授を任せられてゐるのだから、「注射しませう」、「教へませう」と云つても決して越權ではない。要するに「上げる」、「遣る」は必要なき限り使はない方が善く、「呉れる」「下さる」は局外者扱ひにした譯になつてよくない場合の外はすべて使ふ方が善い。

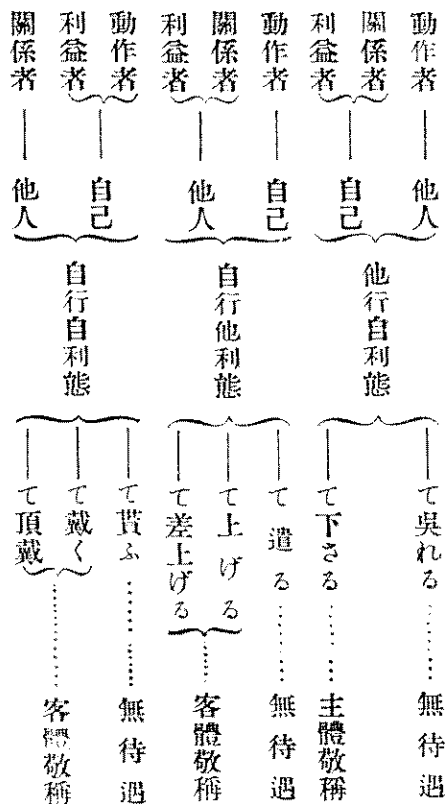
自行自利體は動作者と利益者とは自分であつて動作の關係者だけが他人であるものである。他人の動作を表はす動詞の方法格の下へ、補助動詞「貰ふ」「戴く」を附ける。

彼の方に道を教へて貰つた (戴いた)

貴方に賛成して戴き（貰ひ）たいことがあります

これ一寸貸して頂戴な

「教へて貰ふ」の「教へる」は他人の動作であるが「貰ふ」は自分の動作であるから「教へて貰ふ」全體はやはり自分の動作であつて利益も自分の利益である。それだから自行自利だ。但し動作の材料たる「教へ」は他人の動作であるからこれは「教へられる」の意がある。即ち被動の一種だ。併し「られる」の附いた被動は多くは害を表はすが、これは利を表はす。子供が「日曜に父に英語を教へられた」と云ふと遊べなくて困つた意味だが「教へて戴いた」といふと好都合だつた意味になる。



他行自利態と自行自利態とは他人の勞を多しとする感謝の意を表はし、自行他利態の妙用は自己の分

を守つて他人に干渉がましき越權をなさざる意を表はす。これ皆他人に對して思遣の深い國民性が言語の文法的形式に表はれたのである。

四、同情態

日本の各品詞は其れが單語である場合でも相連つて連語を成す場合でも、又斷句を成す場合でも、その運用法に同情態と云ふものがある。

同情態とは對者をして單に、知力的に我が思想を理解せしめるのみでなく、感情的に彼我相共鳴しようとする感情の發露した用法をいふのである。同情態には從屬語の同情態、呼號語の同情態、完全獨立語の同情態、中止語の同情態の四種がある。

從屬語の同情態

單語でも連語でも意味の切れて居ないのは皆下の語を基本として其れへ從屬するのである。之を從屬語といふ。主語でも客語でも修飾語でも皆その下へ從屬する。

從屬語の同情態は助辭「ね」「ねえ」「な」「なあ」を附ける。

昨日ね、君の所を出ると大降になつてね、大に弱つたよ。

此れをなあ、彼の方の所へ持つて行つてなあ、返事を貰つて來て呉れ、

此の「ね」「なあ」などは何を意味するか。此れは對手の同情的了解を待つ語である。此の「ね」があ

るので語に人情が移るのである。此の「ね」を全部抜いたら、どうだ。誠に殺風景な詞になるであらう。外國人の語がそれである。

對手が分つても分らなくてもべら／＼饒舌るといふことは日本人の爲し得ないことである。此の「ね」が有るので對手がどの位聞き善いか知れない。其れだから小供などにいふ時には殆ど一語毎に「ね」をつけて

あのね、昔々ね、お爺さんがね、お山へ柴を刈りに行きました、そうしてね、お婆さんはね……といふ様にいふ。それで二つ三つの子供にもよく分るのである。話の對手に對して思遺のある國民の言語は自然にこういふ風になるのである。

呼號語の同情態

呼號語には呼號詞と名詞の呼號格と二種がある。呼號詞には固有的の同情態に在るものがある。

ねえ、そうちやござんせんか

よう母様早くして頂戴よう

の「ねえ」は他人の感情を誘ふ語で、「よう」はねだる語である。

名詞は呼號格へは「や」を附けて親愛の意を表はす

太郎や新聞を持つて御出

花子さんやお菓子を上げませうね

この「や」の無い場合と有る場合とを比較したらその人情の發露の具合の差が分るであらう。

完全獨立語の同情態

完全獨立語即ち完全斷句の同情態を示すべき助辭は非常に多い。それだから其れ／＼に應じて色々な情を表はすことが出来る。

「よ」は對手にそのことを告げ知らせようとする情の發露である。

火事ですよ／＼。

まう御飯ですよ

「ぞ」はそのことを教へ示す意味である。「其」から轉じたものだ。

足駄で行き給へ、道が悪いぞ。

雨が降つて來たぞ。干物はないか。

「ぜ」は「ぞよ」の約轉である。

道が悪いぜ(ぞよ)。

雨が降つて來たぜ。

「さ」は外ではない。唯此れだといふ意味を表はす。「ぞは」の意だらう。

此の雨だもの道が悪いさ。(悪いにきまつてゐる)

「て」は「とよ」の約轉だ。自分の感想を人にいふのである。

此の句がどうもうまいて。

毎日降るのにや弱て。

「な」は忽ち感じた時の心の調子を表はす。

雷が鳴るからこれは晴れるな。

まう四時か、まう來ないかな。

此方へいらつしやいな。

召上れな。

「ね」は忽ち感じたことを人に相談する。

ははあ君は疑つてゐるね。

君は今日休んだのか、あゝ日曜だね。

「ねえ」(一) 對手の思想を誘ふ意味がある。

日光は君善い所だねえ。(私はそう思ふ。貴方もそう思ふでせう。我は貴方の賛成を豫期する)

(二) 對手の思想に共鳴する意。

善い所だねえ。(君の云ふ通りだ、私もそう思ふ)

(三) 對手をして我が言を信せしめようとする意味、(一)の意味の強いものだ。

君は日光は善いといふが、大して善くないですねえ。

「なあ」(一)(二)義は「ねえ」と同義だ。但し「なあ」は鄭重な場合と粗末な場合と兩方あるが、「ねい」は其の中間だ。

そうですねあ(鄭重)そうですねい(中間) そうだなあ(粗末)

第四義は獨り感嘆する意味だ。

あゝ困つたなあ。

彼奴中々やるなあ。

「や」は自己の感嘆を述べる。「なあ」の様に緩りした感情でなく、又「よ」の様に告げる意味はない。
シク活へ附ける。

それは餘りひどいや。

その方が善いや。

「は」はワと發音する。女子の語だ。その情を訴へるのである。

本當に面白うござんすは。 それちや無理ですは。

「は」は男子が使ふのは音を稍長く云ひつ放しにする。前語の語末がイでないならばア列に變じて
「は」を「あ」にしても善い。そう思ふ意を表はす。

結局その方が善いは（善いわー） そんな病氣になつてそりやあ死ぬは（死ぬわー）或は死
なー） 誰だつて怒るはね（おこらーね）

中止語の同情態

從屬語が基本語を喪つた場合には從屬語が獨立語化し基本語を兼ねて獨立する。

「よ」 月に千圓ちやないよ。年によ。 私困つてよ。

「さ」 誰だつて、僕がさ。 なせかつて困るからさ

「ね」 いけないと云ふ譯でもないですがね。

「な」 そんなことは出來ないがな。

「ねえ」 それでも困るがねえ。

「なあ」 やつぱり人情だからなあ。

助辭の意味は完全獨立語の場合と同じである。唯數が少ないだけだ。

五、中止法

中止法とは從屬語の下に来るべき基本語を云はずに言を中止して從屬語をして基本語の意味を兼ねしめるものである。大槻博士のいふ中止法と違ふ。

斷る意味をいふ場合でも「其れは困ります。」ときつぱり云ふことは對手に對して氣の毒である場合などに

どうも其れは困るですがね。

などといふことが多い。「困るですが」は從屬語で下に基本語が何かあるべきであるが、それを明瞭に云はずに從屬語をしてその意味を兼ねしめるのである。對手に對して思遣がなければ「困ります」と云ひ切るのであるが、思遣があるからそういふ詞を使ふ。

御あきですかどうか知りませんが、あの本を暫く拜借したいですが。

なども遠慮して云ひ切らない例だ。要するに他人に對する思遣があれば自分の都合の善いことを對手の便不便に拘らず明瞭に云ひうるものが出来ないものである。

六、詞辭の排列

こゝに詞といふは觀念を表はすものゝ意である。詞と詞と連結したものを連詞といふが、連詞も一つの複合觀念を表はすから一つの詞である。又辭といふのは助辭ばかりではない。「辭書」「辭典」などの

辭の意味である。苟くも一意義のあるものを辭といふので觀念を表はしても表はさなくても一意義さへあれば辭である。「春」^{ハル}「秋」^{アキ}「讀む」「書く」なども「を」「に」「た」「ます」なども一つの辭である。

辭と辭と結合したものを連辭といふ。「春」「秋」「を」「に」は單辭であるが「春を」「春に」「秋を」「秋に」は連辭である。連辭の内部に於ける辭と辭との排列は單詞論的の排列である。「春を」「秋を」「待つ」「なる」などは單詞で「春を待つ」「秋になる」は連詞である。連詞の内部に於ける詞と詞との排列は連詞論的の排列である。

連辭でも連詞でも皆二成分の排列から成つて居る。問題はその二成分の内部が又更に二成分より成つて居るかどうかである。縦合二成分づゝの連結が幾層より成つて居つてもその各層の二成分はその一は從屬的成分で一は基本的成分である。

まづ連詞内の詞々の排列から云つて見よう

「春の花」

は連詞だ。「春の」は連體語であるが、此れは從屬部だ。「花の」は基本部である。なぜ「花」が基本部であるかといふと「春の花」は矢張花である。春の花は春ではなくて花だ。そうして從屬部は上に置き基本部は下に置く。連體語關係に於ては漢文も同じだが英語などは一定でない。前置詞に導かれた連體語は下へ置き、副體詞 *Adjective* 及び動詞の連體格 *Participle* 及び名詞の連體格より成る連體語は上にも下に置かれる。誠に不規則な語で實に英人心理作用の混亂狀態に在ることを示すものである。

「大變暑い」

は連詞だ。「大變」は修用語だが從屬部で「暑い」は基本部だ。「大變暑い」は「暑い」の一部だ。「大變」の一部ではない。こういう場合にも從屬部は上で、基本部は下だ。これも漢文でも同じだ。英語などでは一定的ではない。前置詞から導かれたものは下に置くが副詞は上に置くのも下に置くのもある。

「花を見る」

は連詞だ。「花を」は客語で從屬部だ。「見る」が基本部だ。「花を見る」は「見る」の一部であつて「花」の一部ではないから「見る」が基本部だ。こういう場合にも從屬部は上で基本部は下だ。所が漢文や英語では客語は大體下に置く。併しそれも一定的ではない。漢文でも代名詞が客語で動詞が否定の場合には客語を上置くのが正しい用法だ。「天下不我信」「未之有也」といふ風になる。英語でも疑問代名詞や關係代名詞は客語になつても上へ置く。何といふ不整頓なことだらう。國民の頭が亂れて居つたからである。

「花が咲く」

は連詞だ。「花が」は主語であつて從屬部だ。「咲く」は叙述語であつて基本部だ。「花が咲く」は花の一部ではなくて「咲く」の一部だから「咲く」が基本部だ。「咲く」は判定的概念で「花が」は判定に對する對象的概念だ。判定的概念は斷定の基本部、否な斷定其れ自身なのである。こういう場合にも日本語では從屬部は上で基本部は下だ。これは漢文も英語もそうだ。

要するに連詞の從屬部は主語でも客語でも修用語でも連體語でも何でも苟くも從屬部は必ず上に置き基本部は下に置く。此れが日本語に徹底的に一貫した排列法である。外國語はそう行かぬ。

斷定の基本部は意識の中心である。斷定作用が行はれるその最後に鮮明な意識の残るのは基本部である。それだから基本部を一番後でいふのが思想の法則に一致して居るので此れが思想の經濟である。然るに支那人や歐米人は基本語を先に考へて後から客語を考へるのであるから意識の鮮明が最後の客語に残る。それでは斷定としての意識にならないから再前に考へた基本語の觀念を呼び起して意識を新ならしめる。即ち「見る、花を」と考へたつもりでも實際は心の中で「見る花を……見る」といふ風に「見る」を二度考へて居るのである。此の無駄な思想の働きが一日の中に何千萬回繰り返されて居るか分らない。天下に不經濟と云つても此の位不經濟なことはあるまい。こういう國民は他に非常に優秀な點があつて其れを償ふに足らない限りは、こういう無駄をしない國民に最後の勝利を得られるに相違ない。

次に連辭の内部の辭々の排列を云ふと「花を」は連辭である。「花は」從屬部で「を」が基本部である。「花を」は「を」の一種である「花」の一種ではない。「花を見る」の基本部「見る」は從屬部として「を」を要求するので「花」などは要求しない。所がその「を」に更に從屬部として「花」を要求するのである。「花を見る」は「口を見る」であつて「花」は唯「口を」の孔を填めるだけだ。

又「見ました」の基本部は「た」である。「見まし」が從屬部だ、「見まし」で云へば「まし」が基本部で「見」が從屬部だ。即ち「花を見ました」は「た」であり、「口見ました」であるのだ。こういう風に連辭の内部でも從屬部は上にあり基本部は下に在る。又更に云へば「見る」の「見」は從屬部で「る」が基本部であり、「る」で云へば「は從屬部で」が基本部である。それで動詞の終止格は「に終

るのである。

併し「留春の宴」とか、「觀月の記」とか云ふ様に「留春」「觀月」は順序が顛倒して居るが、これは支那人の作つた單詞をそのまま使つたのでその内部までは詮議しないのである。丁度西洋人の姓名を日本では「ジョージ、ワシントン」などいふ様に一語として取扱ふのと同じ様なものである。

日本語の詞辭の排列は徹頭徹尾一貫した規則に由つて支配されてゐる。そうしてそれが腦を經濟的に使用すべくに心理的の法則に合じて居る。

七、結 論

日本語に於ける體系の壯大にして整然たる敬語組織は如何に日本人が他人に對して思遣の深きか、如何に日本人の思想の緻密にして統一的なるかを知らしむるに餘がある。その動詞の利益態、各詞の同情態、中止態は皆他人の思はくを顧慮し彼我同情を以て共鳴せむとする温き人情の發露である。

歐洲語や支那語には敬語はない。多少敬語らしいものが有つてもそれは單純なる修辭的敬語であつて國民思想の發露たる文法的敬語ではない。支那人などは語が約れは何時までも「這個々々々々々と一分間も二分間も云ひ續けるが對手によく分る様に云ふ同情態といふものはない。勿論歐洲語にもない。歐洲語でも支那語でも語は云つ放して彼我の人情の共鳴を求める感情は少しも現はれない。それでは意味が分るだけで情的生活に生きる日本人には誠に約らない。我々はそういう語を知的言語といふ日本語は情的言語である。故福澤氏等の始め演説といふものを興した時に多くの人は日本語は談

話には適するが演説は出来まいと云つたといふことであるが其れはその人たちは日本語の同情態を認めてそう云つたので確に一面の眞理がある。日本人の人情の美即ち「思遣」といふことは斯くまで深く國語に現れて居る。此の思遣が有る以上、上下君臣の親和は決して破れる筈はない。皇統の萬世一系は當然の結果である。忠君も愛國も、忠孝一致も、武士道も皆此の思遣から出で来る。歐洲人には此の思遣といふものが無いから社會は個人單位になつて家族制度は發達せずに仕舞つた。日本の家族制を見て個人單位に移る過渡期に在るなどと思ふのは大變な誤である。思遣がなければ個人は離れ／＼になるが思遣が有れば個人と個人と融合して一つの大なる個人が出来る。その大なる個人の全體及び各部と他の大なる個人の全體及び各部とか又融合して更に大なる個人が出来、遂に君臣を打つて一丸とした大個人即ち國家が出来るのである。此のことを閑却したらば日本人は自己の價値を忘れることになる。今後は大に教育に注意し過去の様な知育ばかりでなく、乾燥的道學的德育でなく、人情の美を發揮すべき情育(人情教育)を施さなければならぬ。思遣の有る國民として益思遣有らしめなければならぬ。此の思遣は同情である。日本人は唯此の美情が有るだけかと云ふと日本語構成の大法則たる詞辭排列の統一的にして秩序井然一絲紊れざることは日本人が知性に於て亦諸外國人に優つて居ることを證するものである。それがなければ僅々五十年間に幾多の先進國を追ひ越して聳爾たる東海の一島國よりして世界三強の一に進むことが出来る譯がない。